

王運熙・楊明著『魏晉南北朝文学批評史』 訳注

甲斐， 勝二
福岡大学

東， 英寿
鹿児島大学

<https://hdl.handle.net/2324/19658>

出版情報：福岡大学人文論叢． 24（3）， pp.883-910， 1992-04-12． 福岡大学研究所
バージョン：
権利関係：



資 料

王運熙・楊明著『魏晉南北朝文学批評史』訳注

甲 斐 勝 二
東 英 寿※

まえがき (翻訳にあたって)

ここに翻訳して紹介しようとするのは、中国上海復旦大学の王運熙・顧易生両教授の編集になる『中国文学批評通史』第2冊、『魏晉南北朝文学批評史』（担当王運熙・楊明）の緒論である。量の都合上今回は魏晉時代の部分を上、下に分けて掲載する。

このシリーズの編集者である王運熙、顧易生両氏は共に復旦大学で文学批評史を担当されている。既に故人となったが文学批評に多くの業績を残した郭紹虞・朱東潤の両氏もここにいた。復旦大学は、中国における文学批評研究の歴史ある一大拠点であると言ってよく、王運熙氏と共に『魏晉南北朝文学批評史』を担当する副教授の楊明氏も、既に高い評価を持つ研究者である。この批評通史は、全部で7つの分巻に別れる。『先秦兩漢文学批評史』（既刊）、『魏晉南北朝文学批評史』（既刊）、『隋唐五代文学批評史』、『宋金元文学批評史』、『明代文学批評史』（既刊）、『清代前中期文学批評史』、『近代文学批評史』である。このシリーズの目的は、「努めて全的に各歴史段階の文学批評の発展過程を整理し、かつてその発展に寄与した作家や論著に客観的な評価を行う。並びに、新資料の発掘に努力し、中国文学理論批評の豊かで多彩そして光輝く成果を示し、その経験と教訓をまとめて、文芸理

※ 鹿児島大学教養部講師

論研究と創作に手本と参考を提供し、繁栄する新時代の学術文化への奉仕となす」(以上《魏晉南北朝文学批評史》『説明』による)ものである。量および質ともに、現代の中国文学批評研究を代表するものと言ってよい。

この書では資料の充実や用語の詳細な検討など、注目すべき点は多いのだが、すでに書評(釜谷武志『中国文学報』第四十三冊, H. 3)があることでもあり, ここでは, その一例として文学総集の成立に対する視点の精密さのみを挙げておきたい。文学総集の登場については, これまで日本では, 鑑賞の立場からのみ論じられて来たように見え, 創作の模範集としての一面はあまり念頭に置かれていなかった気配がある。これは, 当時を代表する総集《文選・序文》に鑑賞の立場が強く現れてもおり, 《隋書・経籍史》の集部総集類に記す所によるためでもあろう。これに対して, この書籍では, 模倣作の流行の状況と総集の誕生とを関係付けて, 「《文章流別集》などの文章様式別の編纂の一つの大きな原因は, 文章様式別の編纂が, 模倣を作ろうとする読者の文章研究に便利であったからである」(翻訳14頁参照)と述べ, また「総集を編纂する目的の一つは読者に文章を熟読させ, 制作を学ぶためである(第一編第三章第三節「総集の編纂と摯虞の《文章流別論》)」と指摘している。このような一面を明確に指摘したことは, 当時の文学評論の性格の考察, 例えば実用文をも文学概念に含めて考えられがちであった状況等に対して, きわめて重要な視点を与えるものである。

翻訳を緒論に限ったのは, 分量の問題もさることながら, 各論の要点がほぼここに尽くされているからである。またこの翻訳の性格にもよる。そもそも, 専門性の高い書籍を翻訳紹介する場合, 対象者によって, その翻訳の意味と性格が決まるものである。専門家には, 翻訳の必要はないし, 必要な部分は緒論にとどまるものではない。とはいえ, 一般の読者が, 文学作品ではないものの翻訳, しかも論文集である紀要に掲載するようなものに, そう簡単に興味を持つとは思えない。そこで, 対象者は主に, 中国の文学批評に興味を持ちつつ, この分野には余り縁のない文学研究者ということになる。具体的にいうならば, 他の専門領域の中国学関係者はもちろんのこと, 日本古典文学関係者や他の外国文学史研究者の比較参考として, あるいは中国の文学批評に進もうとする学生の入門の手助けになることを希望している。よって, 翻訳の仕方も, 極力明快な日本語訳になるように努めた。

引用される作品の原文は, 既にどなたかの翻訳があれば, その前後の分脈にそのものを選んで, それを使わせていただいた所もある。本文では読みづらさを避け, いちいち明示はしていない。続稿末に掲載予定の参考文献を参照されたい。訳注として()を使用する場合

は原書との混同を避けるために（ ）の中に㊦を付けた。引用文に原文の所在が示されていない場合は原書の体裁に倣い後ろに（ ）をもって明示し、同様に（ ）中に㊦を附した。篇末の訳注は訳者が必要と思われるところにできるだけ簡潔に施し、しかもそれは、この書籍中、あるいはシリーズ中の該当する各論の部分に努めてよっている。一貫性をもたせるためである。また、諸先生の論考によるところもあるが、いちいち明示していない。これもまた続稿に掲載予定の参考文献を参照されたい。書籍名・篇名をしめす括弧は、中国の習慣に従い共に〈〉を用いている。〈書名・篇名〉となる。

これらの結果、かえって誤訳や誤解、繁雑さを生んだかも知れない。以上の諸点については、翻訳というものの考え方をも含めて、諸先生の御指導を待ちたい。（1992. 9. 19）

『魏晉南北朝文学批評史』

王 運 熙
楊 明

第一編 魏晉文学批評史

第一章 緒論（上）

魏晉時代（後漢末建安期を含む）の文学批評は、まさにこの時代の文学創作と同様に、これまでになかった繁栄の様相が出現し、まったく新しい姿を示した。曹丕《典論・論文》¹⁾は、作家・文体（㊟ここでは作家のスタイルを言うのではなく文章の体裁、様式をさす。以下同じ。）・文学批評・文章価値と作用などの各面に論及して、いくつかの真新しい視点を提出し、批評史上真に重要な地位を占める。陸機の《文賦》²⁾は生き生きと具体的に文章制作の思惟過程を論述し、文章制作に於ける利病得失を分析し、文学批評の始まりの意義を具有するものである。摯虞《文章流別論》³⁾、李充《翰林論》⁴⁾は、今日佚文がわずかに残るばかりだが、そこには文章様式論に関する全面性をすでに窺うことができる。文学批評の專著の他に、当時の人の手紙、序文、子書及び日常の談論の中にも、なお注意すべきいくつかの文学批評に関係する見解がある。

魏晉文学批評が漢代に比べて大きな発展をするに至った所以には、当然ながらその時代の条件があった。その中で、関係が最も直接的な要素はほぼ二つある。その一は前代と当時の文学活動の発展であり、その二は当時の思想界の状況の影響である。

封建国家政治と社会生活の発展に従って、漢代以来、文章家が作る各種の文章は日増しに増加した。中でも後漢時代（25-220）は、能文の士が多く、諸々の文体は概ね整い、頌・讚・銘・箴・碑・誄・哀・弔・論・連珠・章・奏・書・記⁵⁾などの文体が大量に出現したのであった。これらの文体の中には封建政治と社会生活に直接必要なものも多くある。詩・賦もまたかなり大きな発展があり、特に民間詩歌様式の影響によって、五言・七言の2種の詩体がすでに文人に採用されていたのである。後漢後期になると、文人の作る五言詩はすでに一定の数量があるばかりでなく、しかも相当に高い芸術上の成功を収めている。それらが表出する相思の情、境遇への感慨及び短い人生への悲哀などは、まったく一般知識人個人の情感の

歌唱に属するものであって、決して政治教化作用を持つものではない。建安時代になると、五言詩の創作に活気がみなぎり、次第に文人の詩作の主要な様式となった。そのほか諸々の文体もまた迅速な発展を遂げた。建安時代は作品の数が日増しに増えたばかりではない。質の面で様相が一新した事が更に重要である。詩、賦やある種の散文の抒情性は大いに強められ、その文辞はだんだんと華麗に向い、そのほか各種文章もかなり高度な創作技巧と芸術特色を示し、少なからずの名篇・佳作が現れた。文章家が制作した小説、笑い話などの作品にも発展があった。曹魏と両晋時代には、文章家が輩出し、多くの作品が林のごとく生まれている。〈隋書・経籍志〉に載せる両漢の文集は全部で百余家、三国が六十余家、晋代ではほぼ三百八十家までにいたる⁶⁾。嵇康、阮籍、陸機、潘岳、張華、張協、左思、陶潛等の著名な作家が出現した。彼らの作品は漢代末、建安文人が作った日常生活の情感の表出を重視する伝統を継承し発展させながらも、それぞれ独自の風貌を備え、鮮明な創作上の個性を表出している。文学創作の発達には、必然的に文学批評の発展を引き起こすことになる。作品の大量の蓄積が、批評の発展する前提であるし、創作における新しい傾向は、批評に反映されて、新しい文学観点を形成するに違いない。

魏晉の文学批評の新しい内容は決して突然生まれたものではなく、それに先立つ漢代文学批評のある種の要素が新しい条件の下で発展したものなのである。例えば、諸々の文体に対する研究は、魏晉時代に非常に発展して、魏晉文学批評中の重要な内容となっている。けれども、漢代にあって、人々はすでに詔令、議対、賦、論等の文体の風格の特徴、制作の要求に対して、ある程度の要約概括を行っているのである。また、魏晉時代の人々は、文章の効果と地位について高い評価を与えた。しかし、漢代、特に後漢では、統治者においては文章の重要な作用について、すでに日増しに認識が高まっており、なかでも思想家の王充(27-91)は、文章著述の作用と地位をより高く評論している⁷⁾。漢代儒家文芸思想はもとより統治の地位にあったが、同時に、正統思想の抑圧を受けた幾種かの文芸主張も存在していたのである。例えば、統治階級の多くの人々は民間から生まれた俗楽を好み、特に情感が激しく揺れ動く悲歌苦調の類を好んだ。このような強烈な感情に対する審美の追求は、官学である儒家の詩と音楽理論の許すところではなかったもので、漢代にあってははまだ明確な観点としては示されなかったが、魏晉文学批評に於ては十分に反映されている。また、漢代の儒家は文芸が政治教化に奉仕する効能をしばしば過度に、機械的に強調し、その娯楽性を無視した。しかし、賦と俗楽の娯楽作用を認め、並びにその合理性の承認を求めた人物もいたのである。このような要求は、魏晉時代にはかなり一般的なものとなっている。魏晉文学批評の

中には儒家の文芸思想の合理的な要素の継承と発展を見ることが出来る。例えば、儒家詩楽理論中、人の心が物(㊦現象一般をさす)に感応して情感が生まれ、情感が胸中に揺れ動き詩歌となって表れるのであり、詩歌の主な特徴が情志の表出にあるというこの観点は⁸⁾、魏晋の人々に継承されるとともに、漢儒の情志の内容、及び表現の風格に対する狭い制限を撃ち破るものであった。これを要するに、文学批評の発展もそれ自身の論理性を持つのであって、魏晋文学批評が大きく発展をして、新しい状況が出現するに至った所以は、外部の条件が確かに大変重要なものではあったとはいえ、その内部にある根拠原因も無視することはできないのである。

魏晋時代は思想界に重大な変動が起こった時代であり、これもまた文学批評の発展に有利に働いた。

儒家思想は文芸と社会のつながりを重んじたが、これは本来当然のことである。しかし、漢儒は文芸が政治教化に奉仕する作用を余りに強調し、機械的に理解し過ぎたので、文芸の特徴をおろそかにするに至り、文学作品における題材の内容と表現の風格への要求もすこぶる限られたものになり、文学創作と批評の発展を拘束することになった。両漢の思想と文化領域では、儒家の学術のみが尊ばれ、人々の大多数は經書を物事の判断の標準とし、また問題を考える出発点とすることが習慣となっており、文学批評の領域においてもこれは同様であった。特に後漢時代は、為政者がでたらめな讖緯(㊦一種の予言)迷信、經典の章句にこだわる繁細な学を支持して、人々の思考を厳しく拘束したのであった。このような状況では自ずから学術文化は発展しづらいものである。しかし、反動は必ず来るものだ。為政者の植えつけたこのような学術は、発展して後に至ると、日増しにその虚偽性を暴露しだしたので、統治階級中の多くの有識の士は自分たちの需要にもはや適応できないことにすでに気づいていたのである。桓譚、王充、張衡等の人々は⁹⁾勇敢に讖緯神学に反対したし、当時成果をあげた多くの思想家、文学家及び經学家は広範囲に学識を深めて、經典の章句の考究に詳細繁雑な「章句の学」を好まなかった。応劭は言う、「先王の制度に基づいて当時の事象に立脚する、これが通儒である。もし十分に知識を修得することができても応用することができず、十分に言うことができても行うことができないければ、書物の意義をきわめよむだけであって、古今を往来することができない、これは俗儒である。」(《後漢書・杜林伝》注に引く《風俗通》)。いわゆる俗儒とは、狭い視野に閉じ込めり、世事に疎い章句の徒である。漢末にあつては、この種の俗儒が輕蔑を受けていた事は、すでにごく一般的にみられる現象となっていた。当時、談論に分析的な議論をおこなう風潮が次第に形成されつつあり、

士人たちは多分野の知識を追求しており、思想は日々活気づいていた。伝えられるところによると、蔡邕(133-192)が江南で王充の《論衡》を得て、しきりに愛玩し、北方に戻るに及び、人々は彼の談論が更に磨きを増した事を知ったのであった（《芸文類聚・卷五十五引抱朴子》）¹⁰⁾。王充の様なかなか自由で解放された言論は、多くの人々に喜ばれていたことがわかる。袁紹(?-202)の賓客には俊才の士が多かったが、かれらは百家の言と種種の異端の雑説を理解し、談論を好み、かつて鄭玄(128-200)を初めはただの儒者とのみ見なして、「通人」とは認めえなかった事がある（《後漢書・鄭玄伝》）¹¹⁾。当時の風潮が学問の広範さを重んじており、ひたすら儒学ばかりを学んでいた者は、批判を受けることもあり得たことが知れる。

後漢儒学の衰退は避けられないことであったが、漢末の大動乱がその没落を加速し、文化思想史上の大変革を促した。このとき統治者が最も必要としたのは各種実務的な才能や思想をもって活躍する人物であり、その中には文章制作に長じた人士が含まれている。人材を識別し使いねばならない切迫した需要に対応して、人物の才能や気性を研究する刑名家の学説が勃興発展してきた¹²⁾。古いものばかりを好む儒学者は落ちぶれ、經学に通じていることで官禄を得る道も断絶してしまった。そこで、儒学は急速にその至上の地位を失い、更に魏晉時代を通して地位を回復することすらできなかった。統治者は情勢が落ち着いて後、儒学の提唱を心がけたことがあったけれども、しかし、決してその独尊の地位を回復することはできなかったのである。曹魏正始年間(240-248)以後は、老莊の思想を骨格として儒道を調和させた玄学が大いに発展し、士人の清談が習慣となった。そこで話題となった玄学議論の中心は「本末有無」の問題で、すなわち天地万物の存在根拠に関する問題である¹³⁾。根本的には、このような玄遠の学もやはり現実に存在している社会の反映である。しかし、表現形式から見れば、現実から遠くはなれており、決して直接に現実社会の問題を議論しているのではなかった。

このように、知識階層全体の思想はかなり自由に解放され、拘束が少なくなっていた。様々な観点は、たとえ互いに矛盾するものであっても、同時に存在することを妨げなかったし、それらを皆吸収蓄積することもまたげられなかった。玄学家は「その意を得て言葉を忘れる」「言葉に寄せその意を表出する」という哲学方法を創り出し、道家の書籍《老子》《莊子》であろうと儒家の經典《五經》であろうと、なんでも用いたけれども、一家のみに限って思考を拘束する鎖とすることは決してなかった。同時に玄学は思弁性が強く、人々の思惟能力はこれによって、非常に大きな訓練を受けたのである。よって、玄学の発展は、当

時にあっては思想文化——文学活動の発展をもふくむ——に役にたったのである。中でも注意しなければならないのは、玄学は理論上の探求にとどまるのではなく、士人の内面世界や処世に至るまで深く影響を与え、彼らに逍遙放達、超凡脱俗の精神世界を追求させたことである。当時の士人は、しばしば世間の仕事を気に掛けず、一種の超然的態度でもって現実に対処し、たとえ実際上の日常実務の処理であっても、その精神においては自由放達を追求したのであった。西晋時代の郭象は《莊子》に注して、聖人が「世俗の礼教規範外に遊ぶことによって、その規範内を熟知し、心を無にすることによって、心を持った状態に順う」（《〈莊子・大宗師〉注》）、「廟堂にあっても、その心は山林の中にいるのと異ならない。」（《〈同・逍遙遊〉注》）と説くが、即ちこれはそのような態度の哲学的な概括なのである。人々は、このような態度を「理を究め性を尽くすの妙」（《晋書・辛謐伝》）と見なした。東晋の名臣の庾亮（289-340）は「はなはだ好んでいつも世俗の外に心を寄せていた。柔軟な態度で世をわたり、韜晦してはいたがその心の中はもとより深く静かで、幽玄な心境で山水に対した。」（《世説新語・容止》注引孫綽《庾亮碑文》）と称されているが、これはその代表的な例である¹⁴⁾。このような精神領域は、少なくとも表面の形式上から見る限りは、功利を超越した世界である。ある意味からすれば、それは審美意識の発展に有利なものだ。なぜなら、審美意識は根底には功利性を隠しているとはいえ、表面的には非功利的なものだからである。もし、全てがまったく実用に縛られたならば、審美について語りえるものではない。当然ながら、魏晋から南朝に至るまでに文学創作、批評と社会現実の距離とは日増しに大きくなったが、それはこの理由にもよるのであろう。

魏晋時代は確かに審美意識が大いに発揚された時代である。人物評論について言えば、漢代にあっては、それは元々人材を選び任用するという実際の需要に応えるものであって、明らかに功利性を持つものであった。ところが、魏晋時代になると、人材の選択任用に応じると同時に、人物の容貌、風格、気質、言論等の美的方面に対する評論が大量に現れた。例えば、嵇康（223-262）は「ごつごつとして一本松が一人立っているようだ。それが酒に酔うとぐらりと傾いて玉山が崩れようとするようになる」（《世説新語・容止》）と見なされ、山濤（205-283）は「まるで山に登って見おろすようで奥深く遠い思いがする」（《〈同・賞誉〉》）と見なされ、韓康伯は「いながらにして名士の風がある」（《〈同・品藻〉》）と見なされ、司馬昱は「空高く朝焼けが映えわたるようだ」（《〈同・容止〉》）と称されている等等、すべて政治上の実用性と縁がない。また、山水自然のごときは、東晋から純粋な審美の対象として普遍的に鑑賞が加えられはじめた。山水画が晋宋の間に突然起こったのも、絵画を勸善懲惡の

道具とする伝統的な觀念から、離脱したためであった。文学も同様である。儒学の衰退によって、儒家思想（文芸思想も含まれる）の文人の思考に対する拘束が緩んだので、文学はもはや政治教化の道具や付属物となるのではなく、それ自身の審美作用が十分に肯定された。この美的特徴への人々の認識も日増しに深まり、早くから存在していながらも、儒家正統觀念が押さえつけていた審美趣味や文芸觀點が発展するに至ったのである。魯迅はかつてこの時期を概括して、「文学の自覚時代」（魯迅〈魏晉風度及文章與藥及酒之關係〉）とするが、本当に精確適当なものだ。

漢末魏晉の學術は、初めは刑名家の学説がはやり、人物品評の理論が現れて、正始時代以後は、それが発展して玄学となった。それらと文学批評との関係は、その具体的な内容から言って、おもに次の二つの方面に表れている。第一は人物評論での才性理論、これは直接作家論に影響する¹⁵⁾。漢末以来、人物評論の風潮は大いに盛んであった。文章の作用は日増しに人々に重視されることとなり、文章制作の才能の高下は自然に人物品評の内容の一つとなった。曹魏時代の劉邵〈人物志〉では各種の人材を論述するとき特に「文章家」の一条（〈流業〉篇参照）を設けている事が、これを物語る¹⁶⁾。人物批評理論における気性と才幹との内外対応の觀點は、作者の氣質と文章風格の間の関係の認識について人々を啓発した。人物批評中の「気」の概念は文学評論の領域に引き入れられて作家作品を評論するものとなった。人物評論中の才性類型の区別理論も、作家の創作才能にそれぞれ違いがあることの説明に用いられ、また文学批評における「各々長ずる所を以て短ずる所を相い輕ろんず」（鄒〈典論・論文〉）等の現象の解釈に用いられた。第二は、聖人に情感が有るか無いかに関する議論であり、これは文学創作と批評において、情感を重視した傾向と大きな関係がある¹⁷⁾。この議論は、曹魏時代の何晏（190-249）、鍾會（225-264）、王弼（226-249）等に始まり、後に弁論の題目によく上り、東晋になってもなお議論が行われた。〈隋書・經籍史〉子部道家注には〈聖人無情論〉六卷が有るが、すなわちこれはこの議論の該当部分を集めたものである。魏晉の人物は通脱放達で礼法に関わらず、情性に任せる傾向を本来持っていた。しかし、このような態度は、また〈老子〉〈莊子〉中に主張される清静にして寡欲、時に安じて順に処し、情累を超脱するといった教説と違うものなのである。彼らは、情感の高ぶった表現を喜んだものの、しかし、自分が悲しく辛い気持ちに陥ったときは老莊思想で自己の解脱を得ねばならないのであった。聖人の情の有無の検討は、この種の矛盾を體現したものである。文学批評中では、総じて、情感の激蕩をもって彼らは美としていたといえよう。玄学理論中ではその他いくつかの範疇と命題、例えば言葉と意味との関係は、後世のある種

の文学理論、たとえば「意境」の理論に対して大きな影響を与えたけれども、魏晉の頃はその影響はまだ表面的であり、局部的なものであったのである¹⁸⁾。また、「言は意を尽くさず」（㊦㊧《易・繫辭傳》による）、「意を得て言を忘れる」（㊦㊨《莊子・外物》による）等は当時の玄学家の中で主導の地位を占めた見方であり¹⁹⁾、士人が清談に理を説くときにも言葉は簡潔で気持ちが十分表れている発言が喜ばれた。しかし、文学創作と批評にあつては、決して意識的に含蓄を追求する審美の傾向が形成されていなかったし、いまだかつて「意は言外にあり」等の命題も提出されていなかった。陸機の《文賦》は創作を論じて、「いつも氣に病むことは我が気持ちが対象とうまくそぐわなかったり、気持ちがうまく表現できなかったりすることである。」と言い、言葉と情意の間の矛盾に触れている。これは、魏晉人々の言と意の弁別の議論の反映と見なすべきであろうけれども、しかし、彼はこの矛盾の為に苦悩するばかりで、少なきをもって多きに勝するという方法でもって、意を言外に置いた表現効果を追求することを決して主張してはいないのである。東晉の康僧淵は、張翼の詩を賞賛して、「言葉は意を尽くさないというけれども、これはほとんど意を尽くすといえよう」（《代答張君祖詩》）と言った。張詩が精妙で、意を尽くす域に近づいていることを言うものである。陶淵明は、「この中にこそ真というもののすがたがある。それをことばで説き明かそうとしたものもはやそのことばを忘れてしまった」（《飲酒》之五）といった。美への深い感動は言語による表現がむずかしいことを感じてはいるけれども、彼はいまだかつて文学がまさしく無言をもって深意を伝達できるものであることを自覚してはいない。

これを要するに、魏晉の哲学思潮が文学批評と理論とに与えた影響は、なによりも玄学の発展によって形成された自由解放の精神が、当時の条件の下で、審美意識の発展に役立ったこと、文学の美的特徴に対する認識を深めるのに役立ったところにある。ある種の具体的な哲学観点が文学評論に対してどのような影響を生み出したかについては、文学創作自体の発展状況に即して論じられねばならない。状況は頗る複雑で、簡単な類比やこじつけはすべきではないのである。

第二章 緒論（下）

魏晉の文学批評は主にどのような内容を持っているのだろうか。

一 作家論

魏晉の文学批評史上最初に専門に文を論じた文章—曹丕《典論・論文》は、実際には作家を論じることが主である。曹丕の《與吳質書》もまた当時の作家を専ら論述する²⁰⁾。

《典論・論文》はまず、当時の文人の王粲(177-217)、徐幹(170-217)等の七子を一堂に集めて評論、比較を加えて、簡要な言葉でその創作の特徴、長所と短所を指摘している。曹丕はそれぞれの作家の気質が違うので、作品の「気」即ち風格や面貌もまたこれによって異なると考えていた。また、作者の作文の巧拙にも原因があり、それも生まれながら備わった「気」の清濁の違いによるものだと考えていたのである。このようにして彼は初めて「文気説」を提出し、後世にきわめて大きな影響を与えた²¹⁾。曹丕は、さらに諸種の文体がおのこの持つべき風貌と要求をもち、しかも作者には偏った才能を持つものが多く、完全な才能を持つものが少なく、文章制作に於いてそれぞれ長短ができ、さらに自分ではその善いところばかりを見て、その劣るところを見ず、その結果「各人は得意とするところで、他人の欠点を軽ろんじるようになる」ことを指摘している。このように、彼はまたかなり全面的に各種文体の特徴に触れており、これは批評史上初めての事である。これよりみれば、《典論・論文》中で注目される文気説・文体論は、実は共に作家評論から生まれて来たものであったことがわかる。

曹丕の作家論は当時の人物評論の気風と非常に密接な関係がある。彼が作家を論じるときに用いた方法は、作家の創作の全体的な風貌を概括はするが、細かな分析はしないものだし、それぞれの作家に対比・比較等を加えている。これは人物評論の方法と大変よく似ている。彼が「気」を以て作家を論じたことも、人物評論の気風と関係があり、我々は少なからざる当時の人物が「気」を以て人物をほめた多くの例証を捜すことができる。また、作家の才能にそれぞれ得意なものがあり、偏った才能が多く完全な才は少ないという観点、才能の高下は先天的に決まったものだとの観点に関しては、ともに人物を品評する際に生ずる「才性理論」と一致するのであり、劉邵の《人物志》を参考しさえすれば、これを理解するのに難くはない²²⁾。《隋書・経籍志》によれば、曹丕本人も人物評論に関する専門の著作を書いたことがある。よって彼の作家論にこの種の気風と理論の影響が表れていても、まことに自

然な事なのである²³⁾。後、魏晉の時期に、九段階に人物を評価して官員に推薦登用する九品中正制が行われ、人材の選別、人物の品評すらも一般的な制度となる。そこで、作家評論のほとんどは《典論・論文》のような簡約に概括する方法を採用し、それは後世に深い影響を与えて、次第に古典文学評論中に長い歴史を持つ一種の伝統方式と成った。

二 創作論

西晉の陸機《文賦》は、中国文学批評史上初めて、いかにして構想を巡らし表現するかを専門的に論じた文章である。賦のなかでは、創作の衝動の発生や、創作中の思惟活動の特徴について、見事で真実を得た描写をしている。陸機は創作活動の実質は、構想から生まれて外物と対応する「意」および正確な文辞で表現することにあると指摘する。芸術的想像の広さ、および想像過程での情感の活動と感性による形象化という問題に対する彼の認識は、西洋のそれにくらべてかなり早いものであろう。彼は、初めて制作過程での靈感の問題を提出している。この他に、《文賦》は制作過程での注意すべき問題、例えば、不用なものの刈り込み・主題の強調・俗な表現をさけ新しい表現を取ること及び内容と修辭の主従関係等にも論及している。陸機本人は才能に富む著名な作家で、彼のこのような認識は、おもに、自分自身の創作と鑑賞・批評の実践によるものであり、また後人に深い示唆を与えるものでもあった。

創作の才能については、魏晉では一般に先天的なもの、自然なものと考えられていた。曹丕《典論・論文》では「氣の清濁はそれぞれ資質の差異によるのであり、無理やりに作り上げるわけにはいかない」、「父兄の身にそれが備わっていても、子弟に移すことはできない」と言う。つまり、制作の才能の高下は持ち前の氣の清濁に関わり、伝達困難なものなのである。これは正確な理解とはいえないが、それは制作時に特殊な才能が必要であり、その微妙な部分は言葉で説明し難い自分自身の経験による理解であることを含んでいるのである。これと同時に、魏晉の人々もまた学習というものが制作に対して大きな作用を果たすことを重視している。例えば東晉の葛洪(283-363/343?)は文才の高下が持ち前の氣によって決まることを強調しつつも、その一方で先人の著作を多読してその中に表現を涉猟し、その事類典故を吸収すること主張している²⁴⁾。中国の過去の文章家は、しばしば学問の広汎さを重視し、彼ら自身学者の傾向をも兼ね合わせていて、それは魏晉の文学評論中にも反映しているのである。

三 文体論

文体に対する研究は、中国古代文論の重要な内容の一つである。この研究も魏晉時期に形成された。《典論・論文》は前人と当時の人々の文体特徴に関する認識の基礎に立って、比較的全般的に「奏議は宜しく雅なるべし」等の「四科」の説（⑧八種の文体について各二種ずつ四科に分け、それぞれの持つべき特徴を示したもの）を提出した。続いて陸機の《文賦》は詩、賦等の十種の文体が持つべき風格特徴を簡潔に提出した²⁵⁾。例えば、「詩は情感に即して美しくあるべく、賦は現象を体現して明亮であるべし」など。晋代では一つの文体或は主題について擬作の気風が頗る盛んで、作者は時にはその序文でその文体に対して簡要な説明を加え、並びに前代の名篇を列挙して、簡明に評論を加え、或はその文体が持つべき特徴を指摘したのである。この種の序文中、傅玄(217-278)の《七謨序》、《連珠序》、皇甫謐(215-282)《三都賦序》は最も注意に値する²⁶⁾。これに対して、摯虞《文章流別論》、李充《翰林論》は以前の総集を編集した書籍で、この種の文体研究を更に全般的に完備したものに発展させたものである。

魏晉の人が文体研究の面で成果を上げたのは、詩文制作の擬古の気風と密接な関係がある。漢代以来、前代のある著名な作品の体裁を取り上げて、その主題を援用し、その風格、言語特色を模倣して擬作を行う者が出てきた。例えば、後漢の王逸《楚辞章句》に収める王褒《九懷》、劉向《九嘆》、王逸《九思》等の類は、屈原作品の模倣である²⁷⁾。また、例えば、前漢の東方朔が《答客難》を作れば、後漢の揚雄は《解嘲》を作り、班固は《答賓戲》を作り、崔駰は《達旨》を作って、次第に特殊な「設論」の体裁を形成した²⁸⁾。揚雄(前53-18)は模倣の大家で、彼は屈原の《離騷》、司馬相如の賦を模倣しただけでなく、さらに儒家の經典をまねして《太玄》と《法言》を作った。魏晉になると、このような気風は継続して発展した。時には、何人かの作者が共に同一の題目で擬作した事もあるのである。文章家たちがこのようにするとき、しばしば、前人の作品が表現する思想感情に共鳴し、あるいは文章制作の技巧の卓越さに敬服し、更に自分の作品を前人と比べてみようとするものも出て来る。もちろん、擬作はある文体の制作を習う必要性から出るものも多い。中でも、詔・策・章・表・奏・記等実務上必要な文体は、封建政治生活にあって応用性が広く、習作者が多かったが、これらの文体は書き方の規格、風格特徴の方面でそれぞれ一定の要求があった。そこで、習作するものは模倣練習を進めねばならなかったのである。如何なる原因であろうとも、擬作者は前人の作を大量に読み研究しなければならない。このため、人々は必然的に該当文体の起源と発展、代表作家と作品、制作規範と風格の特徴等について、次第に理

解を深めて行った。《文章流別集》等の総集の文体別の編纂の一つの重要な原因は文体分別が読者の文章研究に便利であったからである。晋代は擬古の気風が盛んであるとともに、総集編集と文体研究の成果も大きかった。これは決して偶然の現象ではないのである。その文体研究の成果が後世に与えた影響は大きく、例えば《文心雕龍》の《明詩》から《書記》迄の二十篇中「その始まりに遡ってその末端を明らかにし、その名を解釈してその意味をはっきりさせ、代表作を選んで作品の評価をさだめ、そこにある筋道を述べてその要綱を提出する」という四つの重要な内容は、晋人の文体論中皆備わっている²⁹⁾。

晋人は様式の近接する文体の弁別に十分注意し、しかも文体の特徴は当然固定していて変わらないものだと思っていた。後人が作る文章と表現手法には変化があるかもしれないが、文体が持つべき特徴から離れてはならなかったのである。このような見方は、後人に大きな影響を与えている。また、このような観点の形成は、封建社会の発展変化の緩慢さと密接な関係がある。多くの文体は各種実際の需要に応じて生まれたものであって、その特徴も実際の用途によって決定されるのである。封建経済の基礎が根本的にまったく変化していないために、その上に生み出される社会、政治制度もまた根本的に変化するはずはない。このようであるから、文書への実際の需要もほとんど変化がなく、文体の特徴も固定したものとなったのである。例えば、それぞれの王朝はすべて天地、祖先、神霊を祭る重大な儀式を挙行している。よって、そこで催される郊廟歌辞の制作は各朝廷にあっては重要な仕事の一つとなり、その作風には端正嚴肅で典雅なものが求められた。社会の発展が遅かったので、歴代文人の生活方式、思想感情も、このためかなり類似した所があり、前代の文章に表現される思想感情に共鳴しやすく、そこで擬古の作も大量に産出されやすかったのである。例えば、上述の《答客難》等の「設論」の作られた理由は、歴代文人が強烈な不遇感を常に持ち続けて、この種の情感をさらけ出し、自分から憂いを晴らす事が彼らに共通して必要とされたためである。これを要するに、文体特徴の固定化は封建社会発展の緩慢さの一つの反映であると言えることができる。

四 文学の審美特性に関する認識

魏晋に所謂「文」あるいは「文章」の範囲は非常に広い。各種実用文体は皆「文章」の範囲に入り、このことは《典論・論文》、《文賦》、《文章流別論》、《翰林論》に於ける文体に関する論述中に明らかにそして簡単に見て取れる。一家の言をなす子書もまた「文章」に属するのである。後漢の王充《論衡・對作》では「書論の作は、漢代が一番多い」と言って

いるし、《典論・論文》になると、「書論は理がなくてはならない」といい、桓範（?-249）《世要論・序作篇》には「書論を著作して、大道をはっきりさせて広めたい」という³⁰⁾。これらのいくつかの例中に所謂「書論」は皆子書を包括して言っているのである。葛洪の《抱朴子外篇》は何度も「文章」の重要性を強調しているが、彼が言う「文章」とは実際には主に子書を指すのである（葛洪は詩賦雜文等に対して子書ほど重要視していない）。また史書も同様に文章に属した。よって劉邵の《人物志・流業》に仕事を分類して「文を綴り著述をなしうるもの、これを文章家とよぶ。司馬遷、班固がこれにあたる」といい、また「文章に才能あるものは、史官の任務を持つ」というのである。たとえ儒家の經典であっても文章なのであったので、曹丕は《典論・論文》に文章の重要性を論述するとき、文王が『易』を述べ、周王が礼を制定したと説き、傅玄は、《詩經》の《雅》《頌》、《尚書》の《典》《謨》を「文章の淵府」としたのである（参《傅子》逸文）。これを要するに、およそ文字に表され、作者の創作能力を表す各種単篇の詩文からまとまった著作まで、すべて所謂「文章」に属し、その範囲は今日の所謂「文学作品」に比べてずいぶん広い。本篇に謂う「魏晉文学批評」は、実は基本的には魏晉に所謂「文章」に対する批評、視点を論述の対象としているのである。

魏晉に所謂「文章」の語の概念の包括するところは広いとは言え、彼らは作品中に備わった美的価値のいくつかの特徴に対しては、既に明確な認識を持っていた。これは魏晉文学思想の重要な内容で、前代と比べると大変な進歩である。

まず、魏晉では文学作品が情感を以て人を動かす特性を重視した。曹植は自分の文学の志向性が「平素から慷慨を好む」（《前録序》）といている。「慷慨」とは即ち胸中を直接表出し、意気は激蕩し、情感は鮮明で人を感動させるという意味である。これは、批評史上強烈な感情に対する愛好を初めて明確に表明したものである。それは、誠に建安作家が共通して持った審美趣味で、時代の気風を反映しているのである。陸機の《文賦》は創作構想を論じては、情感の要素を重視し、文章の利病得失を分析しては、情感を以て人を豊かに感動させるか否かを一つの重要な基準とし、文体を論じては「詩は情感に即して綺靡であるべし」と述べて、鮮明に詩の抒情性を指摘している。「綺靡」とは、作品全体の風貌の美しさが人を感動させることを言い、情感による感動もまた含んでいるのだ³¹⁾。陸雲（262-303）は兄の陸機と文章を討論した手紙の中で、情感が人を動かすかどうかを自覺的にたびたび詩賦批評の標準としている³²⁾。また、西晉の孫楚は《除婦服詩》を作り、「祠堂に臨み胸は痛み、心は引きさかれるようだ」等の語を以て王濟に示している。そのとき王濟は「情感から文章

が生まれるのか、文章から情感がうまれるのかはわからないが、これを読むと寂寥として、妻の大切さが増して来る」(《世説新語・文学》)と称して、読者が受ける強烈な影響力の視点から感情を極度に表現した作品を賛美している。東晋時には、情愛を欠く玄言詩賦が一時を極めたが、それは士大夫の好尚を反映した一側面に過ぎない³³⁾。彼らも同様に、情感や性霊を激しく揺り動かす《子夜歌》等の呉声の歌曲を好んだのである³⁴⁾。人々の情感に対する重視は文学批評の領域にもやはり反映されている。例えば孫統は《高柔集》に序を作ったが、その中で特に高柔(174-263)が妻と離別したとき、「思慕に未練裁ち難く、別れを言いだせない、詩書を贈ったが、それは清らかで婉曲、そして辛さに満ちたものであった」(《世説新語・輕詆》注)ことを特に示している。魏晋の人々が、文学作品に情感世界を表現することを追求したのは、儒家文芸思想に対する突破であった。漢代の儒学は情感が人々に共通である事を認め、かつ詩歌が情が心に動いた産物であることは認めていたけれども、しかし、その帰結点は詩を政治教化の道具とすることにあつたのである。漢代の儒学は一方では詩のこの効用を強調しながらも、日常生活での豊かで複雑な情感を表現することに対しては重視せず、作品の風格の中正平和、溫柔敦厚を強調して、奔放強烈な情感を表現することに反対したのであった。よって実際上は作品の情感表現を厳しく束縛したのである。魏晋文学批評の場合は、情感が人を動かす事それ自体を以て目標としたのである。当時の人は生活の中に感情を表現することはしばしば自由大胆にみえ、しかも、生活に於けるある種の強烈な情感の表出に対して一種の鑑賞の態度も取ったのである。例えば東晋の謝安(320-385)の兄嫁が、自分の夫の早世に、孤独の悲しみを訴えるとき、謝安は客に対して「わが義姉の言葉や気持ちの激しさは後世に伝えてしかるべきで、朝廷の人士に見せられなかったのが残念だ」(《世説新語・文学》)と言ったのであった。甚だしくは人物を品評するときに、情感が有りのままであるか、及びその強さがどれ程かを以て評論の内容としてもいるのである。また、哲学理論上では、聖人には情というものがあるのかそれとも無いのかという問題があった。文学批評に於ける情感の要素の重視は、正しくこのような状況の反映なのである。

意識的に作品の言語風格の美を追求する事もまた、魏晋の人の文学思想中の重要な一面である。《文賦》は「言葉遣いは美しさを尊ぶ」説を提出し、また「音声が調和されて順々に発せられるさまは、五色が次々に並べられたように美しい」と言って、作品の言語に音律の美が備わることを要求した。また、構想中にあつては「百世の間、まだ疑われてきた表現をも収集し、千載に伝わる文句をも採り上げる」とも言う。つまり、文章制作時には古書に

表現文句を捜し求めて取捨を検討せねばならないということで、これは典故の採集を含むものだ²³⁵⁾。これらの観点は文学創作において美的表現を重視した気風の反映である。葛洪は書や論の制作に典故を使用することを重視して、作者が自由自在に古書的事類典故を採集して文章を作ること、それが、学が豊かで才能が高いことの表れであると見なしていた。彼の《抱朴子外篇》はまさしく大量に故事を引用して比喻となし、一種華麗な言語風格を形づくっている。言語風格美に対する具体的な要求は、様々な場合にあって一様ではない。例えば、朝廷での詔・策、及び雅楽歌辞の様な廟堂での祭礼のための作品には、人々は典雅な風格を要求した。このような美的要求もそのほかの作品に影響した。例えば、魏晉の人々の朋友への贈答の詩の中には、重厚で典雅であることを求めて、四言詩体を採用したのがある。摯虞は四言詩を「正体」として、王粲の四言詩が「詩経の《雅》に近い」（《文章流別論》）と誉めたたえたが、これこそこのような文学趣味の反映である。このような審美趣味と文学の側から經典を崇拝するという観点は互いに関係する。例えば、傅玄は《詩経》の《雅》《頌》、《尚書》の《典》《謨》は、文質が互いに支えあい、まことに文章の淵府であると称していた。經書の言語は古朴である。中でも《尚書》中の幾篇かは、頗る古典であって、魏晉時の言語と既に相当な距離ができていた。しかし、ある種の作品は、かえって意識的に《尚書》をまねて、古典な風格を追求し、後世に伝わる名文となった。例えば潘岳（?-215）の《冊魏公九錫文》がそれである。言語風格の美に対する自覺的な追求は、単に抒情の詩賦などの文学性が強い作品に限らず、実用の文体をも含んだ様々な文章の制作・評論においても表れている。実用的文章が美的対象として鑑賞を加えられた理由は、その言語文辞の美が一つの重要な要素であったからである。

五 文学の発展に対する見方

魏晉では、古より現在に至るまでに文章は発展変化したのだと認識するに至った。彼らはこのような変化とその時代の発展の趨勢とは一致するもの、つまり簡單質朴から複雑裝飾に向かうものだと考えていたのである。摯虞は《文章流別論》で銘の文体を論じて「そもそもいにしへの銘はまことに簡約であり、今の銘はまことに繁多であるが、これも理由があることである。質朴さと文飾きの程度が時代によって異なることについては、既に論じておいた。」と言っているが惜しいことにここでは詳細さを欠いており、このような変化に対する態度が肯定的なのか或は不満なのか明確に表示していない。葛洪《抱朴子外篇》では、かなり詳細にこれを説いている。彼は、「いにしえは何事にも素朴であったが、現在は裝飾をし

ないものはない。」(《鈞世》)と述べて、文学もこれと同様であると見なしたのである。このような趨勢を、葛洪は明らかに肯定して、儒家經典の《尚書》が近代の政治実用文である詔・策・奏・議に及ばず、《詩經》が兩漢魏晉の賦作に及ばないとまで言ったのである。摯虞・葛洪が概括した質朴から文飾へ向かう文学発展の法則は主に作品形式、中でも言語風格の角度から述べられたものである。このような観点はまだかなり簡単で大ざっぱなものであるが、しかし、後代に対して深い影響を与えた。例えば梁劉勰の《文心雕龍・通變》では古今の文章が時代によって異なることを論じるとき、この見方を継承したのである。

六 文章の作用と地位を論じる

魏晉文学批評では文章の作用と価値及びその地位に対して、非常に重要なものと見なしている。《典論・論文》では文章とは「経国の大業、不朽の盛事である」といい、《文賦》は文章が「雲雨のようにしっとりと人々の心を潤し、鬼神のように変化窮りない」ことを称えている。摯虞は文章とは「上下の事象を説き、人倫の秩序を明かにし理を極め性を尽くし、それによって万物のあるべき姿を究明する」(《文章流別論》)ことができると説き、葛洪には文章を功績・徳行と同様に高いものと認め、「徳祖文精」の説すらあるのである³⁹⁾。

文章がこのように重要に見なされたのは、なぜだろうか。まず、やはり文章が政治教化に奉仕する効用を持つことによる。文章の範囲には、封建国家政治生活で必要とされた諸文体(詔策、章表、奏議、盟誓、檄文、封禪文、碑銘、哀誄、及び重要な典禮に用いる詩歌、功德を歌い誉める頌等)を含んでおり、礼楽の制作、各種制度の制定、封禪祭祀から外交戦争などきわめて重要な場合にあっては皆不可欠なものである。よって当然「経国の大業」ということになる。子書は教化を助け政治に益ある作品と認識されて、史書は統治者のために参考になり、しかも勸戒に役に立つので、その重要性は自ずと明らかである。曹丕、曹植は共に子書を重視している。陸機はかつて子書を著そうとしたが完成していない、また晋代の史書を撰じたことがあり、その《晋書・限断議》は有名である。《文賦》の最後の一段は文章作用の大きさを説き、「未来にむいては後世に規範を伝え、過去をあおいでは古人に手本を則る。文王、武王の道が地に落ちることを防ぎ、先生の風教がほろびないようにする。」など、正しく彼が子史・著作を撰じたのとは一致する。要するに、封建社会の発展に従って、文章の政治に於ける作用は日増しに人々の認識するところとなったのである。詩、賦この両種の作品は、魏晉時に抒情性が大いに強まったが、しかし、諷諫譏刺の伝統的な見方は、決して否定されなかったのである。例えば曹魏時代、劉邵は《許都》《洛都》の二賦を作った

が、その意図は諷諫にあったのである。葛洪は当時の詩作にはおおげさな誉め過ぎが多く、《詩経》の風刺精神を失っていると批判している。李充は《翰林論》で、庾璠(190-252)の五言詩を賛美して「道徳をもって道を治めることでは、《詩経》詩人の意図を持つものといえよう。」と言っている。共に詩の風刺作用に関する伝統的見方を継承しているのである。

これと同時に、魏晉では政治意義を持たない詩賦等の作品の抒情、娯楽作用に対しても十分な認識と相当高い評価がある。これこそ文学の自覚時代の新しい現象である。曹丕は文章は「不朽の盛事」と説くが、抒情詠物の小賦と詩歌をその中に含むのである³⁷⁾。かれは、このような作品のできばえが立派で、作者の文学才能を表現しさえすれば、作者を不朽にさせるにたると考えていたのである。曹植は辞賦を小道と言ったことがあるけれども、しかし、実際には自分の辞賦作品に非常に自信を持っていたし、ならびに当時及び後世の人の自分の文学才能（辞賦の制作鑑賞の才能を含む）に対する評価に強い関心を持っていた。その《前録序》ではすばらしい芸術風貌を持つ作品を心から賛美しており、それは慷慨して感動させる詩賦を含んで述べるものであるが、作品の政治作用は決して強調されていないのである。陸機《文賦》末段では、大いに文章の政治教化作用を肯定しているが、しかし、賦全体から言えば、主として文学性の強い抒情作品について論述するものである。庾珣(?-217)《文質論》では比喩を使って「文」（文学芸術を含む）の鑑賞娯楽、美感を啓発する作用と、巨大な政治作用を並べて提示しているのである³⁸⁾。一般的に言って、漢儒は、詩賦が日常の情感を表出すること、及び読んで楽しむ作用にたいする認識が充分ではないが、魏晉では、日常生活の情景と感慨を表現して政治内容を持たない作品にも高い地位を与えている。これは大変な進歩である。

魏晉の人は文章と言うものは作者にとっては、即ち情志を発憤し、愁いを解消し、自らを楽しませる道具であると見なしていた。漢人には文章制作に愁いを晴らすものとの見方がある。例えば《漢書・東方朔伝》では、東方朔が《答客難》を作ったのは「これによって自らを慰め諭す」ためであったと言うし、後漢王逸《楚辞章句》でもしばしば屈原の作品に憂愁を取り除く自慰的な意図があったことに何度も言及している。魏晉ではしばしばこの点に触れられている。例えば、東晋の陶潜(365-427)《感士不遇賦序》に「意気を伝え得るのは、文章があるばかりだ」と言い、載遠(?-395)は善惡応報の混乱が究明できない事に感慨して、《釈疑論》を作り、自ら言うには「かつて災いにまわりつかれ、手持ち無沙汰に《釈疑》をつくり、これによって気晴らしをした。これこそ情が心中に発して言葉に表れるというものである。」(《答遠法師書》)と。陸機《憫思賦》は亡くなった姉を哀悼し、はっきり

と「この賦をつくり、これによって悲しみの情を和らげる」と言っている。してみると、生活において種種の鬱結が生じるとき、それを文章に表出すれば、作者の情感はなんらかの平静に至り、内心はある種の平衡に達することができるのである。このような見方は、後に梁の鍾嶸《詩品序》で、詩は「困窮卑賤の環境にあつて心を安んじ、ひっそりと暮らしていても息詰まりを感じさせない」ものであるという説、及び中唐の韓愈の「不平の鳴」の説と一致するところがある³⁹⁾。《文賦》に所謂「かの文章制作の楽しさは、もとより聖人賢者の重んじたものである」となると、苦しい創作行為を経て、快樂と満足を獲得する意味を含んでいる。これは彼の経験に基づく言葉であり、文学創作の発達の後、人々が文学の効用に対してもった一つの見方を反映しているのである。(以下続稿)

魏晉文学批評（上）注

1) 曹丕<典論・論文>：曹丕（187-226），字，子桓。漢によって魏公に封じられた曹操の子。弟に文名の高い曹植がいる。建安16年五官中郎將，漢の副丞相，22年に魏国皇太子。25年曹操の死後，魏王をつぎ漢の丞相となるや，漢に代わって魏を開き，対立する蜀・呉とともに3国時代の幕開けとなる。建安後期，曹操が集めた王粲・陳林等の文人との交友が，文学史上の佳話として知られる。この<典論>は，曹丕の「一家言を成す」著作で，建安末の作。かなり自信があったらしく，呉の孫権にも送り，死後にはその廟門の外にその刻石が立てられた。宋代にほぼ滅び，今は佚文が嚴可均<全三国文>に集められる。<論文>は，その内の一部で，6世紀前半に編纂された文学総集<文選>に抄録されて，多くの読者を持った。原書の第一編第一章第一節「曹丕和<典論・論文>」に詳論あり。

日本語への翻訳は，筑摩書房<世界文学大系72・中国散文選>，平凡社<中国文学大系・漢魏六朝唐宋散文選>，集英社<全釈漢文大系・文選>，学習研究社<中国の古典・文選>，角川書店<鑑賞中国の古典・文選>等に掲載。

2) 陸機<文賦>：陸機，字，士衡。呉（今の蘇州）の人。武門に生まれ，若くして呉の滅亡にあう。弟の陸雲と共に長年の閉門読書の後，西晋太康年間末に陸雲と共に上洛，弟と共に文才をもって称せられ，官職を歴任。のち，戦乱に巻き込まれて殺害される。陸機の作品は，強烈な情感と，豊かな修辭，対文の重視など西晋文学發展の新傾向を示す。<文賦>は，その文学観を示す代表作で，<文選>に収められる。その制作年代は，晩年（40才前後）の作と考えられている。第一編第三章第二節「陸機和<文賦>」に詳論あり。

翻訳として，集英社<全釈漢文大系・文選>，学習研究社<中国の古典・文選>に含まれ，筑摩書房<中国詩文選・潘岳陸機>では丁寧な解説がつけられる。

3) 摯虞<文章流別論>：摯虞，字，仲治，長安の人。晋武帝泰始年間（265-274）に官職につき，官職を歴任したが，懷帝の時，洛陽の荒廃により，飢餓する。残された文章からすると礼制に詳しかったようである。彼は大部な文学総集である<文章流別集>（散逸）を編集したが，それには作者小伝の要素を持つと見なされる<志>と，文章様式論と解釈批評論が含まれた<論>がつけられており，<文章流別論>はその<論>の部分が独立したものと考えられている。従来，この書をもって中国における文学総集の始まりとするが，実際にはそれ以前にも文体別の総集が幾種もあったようである。<文章流別集>は，それらの文体別の総集の集大成の性格を持つ。第一編第三章第三節「総集の編纂と摯虞の<文章流別

論』に詳論あり。

4) 李充〈翰林論〉：李充，字，弘度。江夏鍾武（河南省）の人。生卒年は不詳，〈晋書・文苑伝〉に伝記がある。図書の分類整理において，現在の四部分類の基礎を作る。〈翰林論〉はつとに散逸しているが，記録から摯虞の〈文章流別集〉と〈文章流別論〉の関係と同様に，〈翰林〉と言う文集部分があり，それにつけられた〈論〉の部分が〈翰林論〉であつたろうと推察されている。逸文よれば，〈翰林論〉は文章体裁についての要点をのべ，同時に優秀な作品を例示し，評論もしたらしい。第一編第四章第二節「李充」に詳論あり。

5) 頌・讚・銘・箴・碑・誄・哀・弔・論・連珠・章・奏・書・記：共に異なる場面に作られる文章体裁，様式を示す名前。時には類似する性格の文体をまとめ，頌讚とか書記など併称されることがある。このような文章体裁は，一般に「文体」と呼ばれ，中国古典の文学総集の編纂に於いては，その作品分類，配列の基準となった。ただし，この文体分類の仕方には，選者によって微妙に違うところがみえる。例としては，〈文選〉の目録を参照されたい。各文体の性格については，南朝齊代の末に作られたとされる〈文心雕龍〉（筑摩書房〈世界文学大系〉，平凡社〈中国文学大系〉，明治書院〈新釈漢文大系〉中翻訳あり）に詳しい説明がある。

6) 〈隋書・経籍史〉：唐代に編纂された隋代（581-617）の歴史書である〈隋書〉に含まれる当時の学術図書目録と概説。当時の学術状況と書籍の有無を知るための貴重な資料。その訳注が，〈中国文学報〉（京都大学中国文学会）に載せられている。

7) 王充：字，仲任。会稽（浙江省）の人。貧しい家に生まれた彼は，本屋で立ち読みをしながら勉強したという。当時の保守的な思想に反対して代表著述である〈論衡〉を仕上げた。そこに窺われる文学観は，まだ文学作品（当時所謂文章）と学術著述（当時所謂文学）を分離しては考えたものではなく，文学観としては広義のものであるけれども，現在の文学観へ通じる視点も少なくない。後漢の文学批評を考える上で欠くことのできない存在で，かつ後世への影響も無視できない。〈中国文学批評通史〉シリーズの〈先秦兩漢文学批評史〉（顧易生・蔣凡著）第二編第三章第四節「王充」にその文学観について詳論がある。

8) 漢代儒家の詩と音楽理論・観点：漢代に官学の位置を占めた儒教は，古来詩歌や音楽の性格及びそれによる政治上教化作用に注目した見解を持っていた。それは，前漢に成立したとされる〈礼記・楽記〉に結実する。詩・楽・舞が一体になっていた古代の思想を継承するもので，「楽」とは言え決して音楽のみにはとどまらず，文学の発生，感動の原理といった一般文芸原理にまで通じるものがある。たとえば，「およそ音楽の起こりを考えれば，

それは心の動きによって生じるのであり、そして心の動きは周囲の物ごとが原因となっている。」とか、「人々を互いに親しませ、憂いや悲しみを忘れさせるのが、音楽の性能であり、人を喜ばせるのが、音楽の作用である」等。そこには美と心との関係に対する非常に分析的な観点が見られるものの、しばしば礼の機能や作用と共に論じられ、最終的には「賢王たちは、礼によって人の志望を正しく導き、音楽によって人の声を和らげ、政治によって人の行動を規制し、刑罰によって邪惡を防ぐことに努めた。禮楽刑政の四者はその目標を同一にするものであり、四者は、要するに民心を和合し齊一にして、太平の世を実現させる手段なのである」（以上訳文は明治書院『新釈漢文大系・礼記』による）と述べて儒家の教学の思想に導こうとする。なお『先秦兩漢文学批評史』第二編第二章第一節「『礼記・楽記』及其他」に詳論あり。

9) 桓譚：字、君山、沛国相（安徽省）の人。前漢末から後漢初めに生きた。その『新論』（散逸）には、漢代を代表する文学観が窺われる。『先秦文学批評史』第二編第三章「桓譚」に詳論あり。

10) 蔡邕：後漢末の経学者。曹魏時代の建安文学を興した人物らへ強い影響を与え、後漢文学から建安文学への橋渡しの役割を演じた人物として知られる。

11) 鄭玄：北海高密（山東省）の人。漢代の経学の集大成者として知られ、現在でもその注釈が参考にされる。『詩経』毛傳への注、『詩譜』、『詩譜序』等から、漢代経学家の文学観が読み取れる。『先秦兩漢文学批評史』第二編第四章第二節「鄭玄」に詳論あり。

12) 刑名家：内容と呼び名の一致を要求し、もって秩序の維持をねらう学派。形名家とも言い、所謂名家のこと。人物評論と名家の関係については、『隋書・経籍史』子部名家類にこの時代の人物評論の代表作劉邵『人物志』が記録されていることから、その緊密さが知れる。また劉邵には実務重視の法家に属す書籍もあり、これは名家と法家との近縁さを物語るものである。魏晉では「名理の学」としてしばしば表現された。

13) 玄学：實際を離れた形而上学で、魏の何晏・王弼に始まるとされる。『易』、『老子』、『莊子』の三書を「三玄」と呼び、おもにこの三書に依拠した思弁的な学。

清談：おもに上記「三玄」に依拠しての議論談論で、競技的な性格を持った。

本末有無：『老子』に所謂「無」と「有」の関係及びその位置づけを巡る議論で、王弼の例を挙げれば、『老子』40章「天下万物生於有，有生於無」に注をつけて、「天下の事物は、皆「有」より生まれる。「有」の始まりは、「無」をもって「本」とする。もし、「有」を「有」たらしめようとすれば、必ず「無」に帰らねばならない。」と説く。天地いつさいの事物を

生むものとして「有」概念を当て、その「有」の存在を支えるものとして「無」概念を考える。よって、「有」と「無」との関係をいえば「無」は根本の地位にあり、「有」は末枝の位置につくことになる。

なお、以上のような清談関係については、青木正児全集第1巻「支那文学思想史」中にかなり詳しく述べられている。

14) 《世説新語》：劉宋劉義慶(403-444)撰。德行、言語、政治、文学等の部門別に、後漢から東晋にかけての名士文人の発言や行いを集めた逸話集で、当時の人物評論の状況や清談の様子などが記され、士大夫社会を知る上で参考にされる。梁代劉孝標がつけた注には、現在残っていない書籍が多く、これもまた当時を知る上での資料である。翻訳として、筑間書房世界文学大系『中国古小説集』、平凡社中国文学大系『世説新語』、明治書院新釈漢文大系『世説新語』等がある。

15) 才性論：清談の主要題目の一つで、人物の「才」と「性」の関係に就いての議論ではあるが、現在余り資料が残っていない。「性」を人の本質的な道徳的素要とし、「才」を実用的な才能としてその二つの概念の関係を議論したらしい。

16) 劉邵《人物志》：劉邵、3世紀前半の人。《人物志》は人物鑑識に関する分析的な書籍で、後漢以来盛んになった人物評論の集約として見なされる。訳注に、多田狷介『「人物志」訳稿』上下(『史艸』20・21)がある。

17) 聖人情感：聖人には喜怒哀楽怨の所謂五情有るのか無いのかの議論。何晏は聖人には情が無いと説き、王弼は聖人は一般人と同じように情はあるが、事物に引きずられないのだと説く。しばしば理性を乱すものの人間の証でもある情の存在をどう考えるか、この問題への注目は人間性の理解への問題につながり、哲学上の議論にとどまらない。魏晋の思想が漢代とは異なるものであることを示すものでもある。

18) 意境説：例えば、明代朱承爵《存余堂詩話》では「作詩の妙は、すべて意境融徹にある。言語を越えたところでこそ、真味を得られるのだ」と説く。言語表現を越えて伝わるものの味わいこそを重視するもの。

19) 言葉と情意の関係：意味とその表現との関係については、当時よく議論されたらしい。王弼の《周易釈例》では、占いによって示される記号と記号の持つ意味、及びその意味を説明する言葉との関係について、説明の言葉が分かることが真の記号を理解したこととはならず、現れた記号を理解することが記号の指し示す真の意味を知ることにはならない、よって、このような言葉の拘束を離れることが真の記号を理解することであり、記号の拘束

を離れることが、真の意味を理解することである、と説く。一方、嵇康には「言尽意」の説がある。言葉とそれが示す意味との関係については、当時、玄学家の話題にしばしば取り上げられたらしい。

魏晉文学批評史（下）注

20) 曹丕〈與吳質書〉：吳質(177-230)。建安時代の文学サロンの様子を示す書簡として知られる。〈文選〉に収録され、翻訳も幾種がある。筑摩書房〈世界文学大系・中国散文選〉、平凡社〈中国文学大系・漢魏六朝散文選〉にも収録。

21) 「氣」と「文氣説」：「氣」はかつて人体生理作用や精神現象等の説明に用いられてきた概念であったことから、人物評論にて個人の氣質・性格を評価するときにも用いられるようになった。漢代では、「氣」で、人間の品格、氣質、才能を説く方法がかなり一般化していたが、漢末三国時代になると、さらに具体的な人物評論にも、「氣」の概念をもちいはじめた。この場合「氣」の示す内容は広範囲で、道德品質・性格・知恵・才能等の各方面にまで及ぶ。それが、文学評論に用いられるときには、作家自身の生来の氣質・性格とそこから生まれて来る文章の風格を含めて示すことになる。この相関関係を説くのが「文氣説」である。この文学批評に現れた「氣」の問題については、〈魏晉南北朝文学批評史〉第二章曹魏文学批評、第一節「曹丕和〈典論・論文〉」に詳論がある。

22) 「才性理論」・〈人物志〉：上篇訳注15) 16) 参照。

23) 曹丕〈士品〉：〈隋書・經籍史〉子部名家類には、人物評論の專著劉邵〈人物志〉と同じ類に属す〈士操〉という書籍が録される。〈人物志〉同様に人物評論の專著であったらしい。

24) 葛洪：字、稚川。丹陽句容（江蘇省）の人。道教の影響を強く受け、〈抱朴子〉を著す。彼の〈抱朴子〉に示される文学論は、おもに一家言をなす著述である子書について述べられたものであるが、詩賦について述べたものもある。本書籍第一編第四章東晉文学批評第一節に「葛洪」としてその文学論の特徴が詳論される。

25) 文体：それぞれの状況が要求する文章様式、体裁を文体という。この文体の種類は、〈後漢書〉の伝記に記録されたものをみると、後漢期には概ねできあがっていたらしい。魏晉期において、この文体の性格議論や文体別の総集編纂が進み、文体に対する認識が高まって、齊梁期の〈文心雕龍〉や、〈文選〉に見られる詳細な文体分類に向かっていく。この文

体の分類整理変遷については統稿南北朝文学批評史訳注に表で示す予定。ここでは曹丕《典論・論文》、陸機《文賦》の該当部分を訓読で示すことにする（訓読は伊東虎丸、横山伊勢雄編『中国の文学論』掲載を使用）。文体の順番に注意。

《論文》：「奏・議は雅なるが宜しく，書・論は理なるが宜しく，銘・誄は実を尚び，詩・賦は麗ならんと欲す」

《文賦》：「詩は情に縁りて綺靡にし，賦は物を体して瀏亮にす。碑は文を披いて質を相け，誄は纏綿として悽愴にす。銘は博約にして温潤，箴は頓挫して清壮，頌は優遊して以て彬蔚，論は精微にして朗暢にす。奏は平徹にして以て閑雅に，説は焜燁にして譎誑にす」

26) 傅玄《七謨序》、《連珠序》：傅玄，字，休奕。北地泥陽（陝西省）の人。《七謨序》は、彼の作った《七謨》の序で、《七発》《七激》など、「七」のついた作品についてその初めから近代まで、例を挙げつつ簡略に評論している。《連珠序》では、連珠の起源と発展、歴代作家の評論の他に、連珠の名の由来やその持つべき特徴を論じている。

皇甫謐《三都賦序》（《文選》収録）：皇甫謐，字，士安。安定朝那（寧夏）の人。《三都賦序》は、同時代の文章家左思の《三都賦》につけた序文ある。そこでは賦の体裁特徴、賦の起源と発展が述べられ、歴代の作家作品に対して評論が加えられている。

彼らの文学論については、この書第一編第三章西晋文学批評第一節「傅玄・左思・皇甫謐」として詳論がある。

27) 王逸《楚辞章句》：王逸，字，叔師。楚辞は戦国時代楚国の屈原の作品とされる離騷，九歌等，更に後人の擬作をも一括しての文体名。この楚辞の成立に就いては，日本では現在，楚国の祭礼習俗や歌謡等との関係から考えられており，屈原という作者の存在も伝説上の人物として扱われる場合が多い。王逸の《楚辞章句》は現存する最も早い楚辞の注釈本。南朝梁代に編纂の《文選》には離騷体として，屈原の作品とともに，宋玉《九弁》，《招魂》，劉安《招隱士》が収められ，《文心雕龍・弁騷》では屈原作品の後世への強い影響が説かれている。屈原，宋玉，劉安，王逸，劉向については，《先秦兩漢文学批評史》にそれぞれ詳論あり。

28) 説論体：《文選》にみられる文体。《文選》には「説論」として本来賦の形態である東方朔《答客難》，揚雄《解嘲》，班固《答賓戲》を収める。なお，揚雄，班固については，《先秦兩漢文学批評史》にそれぞれ詳論あり。

29) 《文心雕龍》：劉勰によって作られた南朝齊代後期の成立と考えられる文学理論の専著。その文学論については，統稿参照。第二編南北朝文学批評第三章「劉勰と《文心雕

龍」で詳論。

30) 桓範<世要論・序作篇>：桓範，字，元則，沛国（安徽省）の人。建安の末，曹操の下に入る。<世要論>は<隋書・經籍志>では子部法家類に属す書籍で，現在は逸文しか残っていない。本来政治論の書籍ではあるが，その中には，肖像画への讃語，碑銘，議論文等に対する意見が残る。第一編第一章第二節に「桓範」として詳論がある。

31) 慷慨：曹魏の文学を語る上でのキーワードの一つ。世情の混乱，老衰への嘆き，離別の悲しみ等およそ情感が鮮明に人を動かすものを「慷慨」という。漢代儒家の溫柔敦厚，中正平和の文学観の拘束を破る主張として評価される。第一編第二章曹魏文学批評第一節「曹植」に詳論。

綺靡：詩の美的特徴に就いての評語で，作品が美しくすばらしいの意味。疊韻語で，綺の単用もあり，また「猗靡」と通用されるが，意味はおなじ。用例では，器物，風光，談話，態度等の人を感動させる美しさの他に，男女の情愛，音楽の感動等，思惟活動等にいたる美感がこれらの語で示される。第三章西晋文学批評第二節「陸機和<文賦>」に詳論。

32) 陸雲：字，士龍。三国呉の人。陸雲の文集には兄陸機に当てた手紙が三十通を越える。その中には文学論が少なくなく，そこでは，「(兄様の離別の詩)<答少明詩>も余りよいできばえではありません。考えますに，悲しみが感じられません。悲傷な言葉がないのです。」といった情感表現重視の批評が観られる。第三章西晋文学批評第二節「陸雲」に詳論。

33) 玄言詩：東晋時代に流行した詩で，玄学の議論性を帯びるものらしい。後世の批評で「理はその辞を過ぎ，淡呼として味寡し」(<詩品>)と評されるが，現在ほとんど残っていない。

34) 呉声<子夜歌>：音楽にのせて唱われる詩歌である楽府の一種。呉声は東晋建業（南京）地区の民歌による楽曲で，<子夜歌>はその歌辞。春秋晋の女性子夜が初めに作ったとされるものである。後人の擬作が多数あり，男女の情愛に満ちたものとなっている。

35) 原文は「収百世之闕文，採千載之遺韻」。この訳文は原書 P99，「陸機和<文賦>」に，この引用文を解釈して「たとえ古書で問題があるものでも，構想中，頭の中に前人の作品が全て浮かんで来て，取捨選択に供されることを言う」とあるに従う。

36) 徳粗文精：葛洪は著述と徳行を並び重視して，徳行が本であり，著述などの文章は末であるという説に対して反対した。そして，「徳行は実体のあるもの。その優劣は見やすい。文章は微妙なもの，その実体は微妙なもの。その本体は見分けにくい。そもそも見やすいというのは，粗いもの。見分けにくいというのは，精緻なものである。」(本田濟<抱朴子・

尚博>訳注)と言うのであった。

37) 文学経国之大業，不朽之盛事：曹丕<典論・論文>のこの発言に魏晋の文学自覚を読み取ろうとする人は多いのだが，ここにいう「文学」は，実は所謂一家言である子書の著述を言うのであって，直接には我々のいわゆる文学である詩賦を意味しない。しかし，<典論・論文>の他の部分では詩賦について触れてもおり，またこれらは朝廷の儀式に於ける政治上の必要性もあった。彼の<與王朗書>では不朽の行為の一つとして，<典論>とともに詩，賦を挙げているから，曹丕が詩賦にこれまでとは違った観点を持っていたことは間違いない。ただし，その場合の詩賦の内容に如何なるものを観ていたかに就いては更に詳しい検討が必要と思われる。第一編第二章曹魏文学批評第一節「曹丕和<典論・論文>」に詳論。

38) 応瑒<文質論>：応瑒，字，徳璉。汝南（河南省）の人。かれの<文質論>は阮瑀の「質」（内部本質）を重んじ，「文」（外部形式美）を軽視する<文質論>に反駁して作られたもので，共に人物と治国の角度からの議論。応瑒は「文」は耳目を楽しませ，生活を美しくする所にこそその存在価値があり，内容の堅実さから「質」と長短を競うわけにはいかないと説く。第一編第二章第二節に詳論。

39) 鍾嶸<詩品>：鍾嶸，字，仲偉，頻川長社（河南省）を祖籍とする。<詩品>は，梁代に彼が編んだ五言詩專評の詩論。歴代の詩人を上中下に分け，その源流を示した。続稿参照。第二編第四章「鍾嶸<詩品>」にて詳論。

韓愈「不平之鳴」：韓愈，字，退之。中唐を代表する文学者。「不平之鳴」は，<送孟東野序>に見える言葉。人間の言葉や歌が発せられるのは，心中平静でない何物かがあるからだとする説。